

鎌倉三代記

廣徳神異録に曰く、天地は凶惡を長育せず、蛇鼠は龍虎と成る事能ず、天網恢々たり去て何處に行んとす、天性大樹の御氣性、花實備はる鎌倉山、動きなき世に扇が谷、千代萬代の龜が谷、春知りがほの梅が谷、時めく源氏ぞ芳ばしき。時維建仁三年源の頼家卿、故右大將家の譲りを請け征夷將軍に拜任有る、虎は威有つて猛からぬ廿二歳の若綠、丁固が松と見ゆれども、李白が酒杜牧が色、二つのしなに身を浸し、政道怠り給ふ故、秩父北條土肥小山、舊老竹馬の忠臣等、度々に諫の術盡きて、勤番出仕も遠ざかれれば、辯佞邪曲の若者共、晝夜お側に蹲踞する、中にも比企の判官が、いつき娘の若狭の前、君御寵愛淺からず、一幡君とて當年は、四歳の若君ましませば、舅心に邪を裁けど比企能員とて、貪慾驕邪のあら入道同名三郎員家、笠原太郎兼澄中野の五郎廣教、胸に惡事を徒黨の武士、まくらをわつて謀計の、色には出ず判官は謹んで申様、判官扱も此頃出羽の國羽黒山の山伏、願行院豪海とて當國に徘徊し、假令ば手足叫

はざる年來の病人を一祈に働かせ、啞に忽物言はせ盲人に眼を開かせ、難病癡病加持力にて本復させずと云ふ事なし、世舉つて此驗者を活不動と尊稱す。去に依て某も密に私宅に招き寄せ、殿若君の御身の上、祈禱を頼みしに、丹精を擡でて御壽算二百餘歳迄は、慥に加持し延せしと、卷數を持參し今朝より、大廣間へ相話させ置く。御目見得を遂げさせ度願ひ入候」と詞を盡し言上す。頼家卿、御機嫌麗しく、頼家「其驗者儀は某も、先達て聞てあり急いで招喚致すべし」それ此方へと御説にて、奏者に連れだち願行院、悠々と立出て御目通に畏る。頼家御覽じ、「ム願行院豪海とは貴僧の事よな。世は濁亂に及べども三密ゆがの功積り、病苦を救ひ且は又、鎮護國家の止觀の旨、甚以て神妙なり。今日よりしては頼家が祈の師ぞ」と宣ひて渴仰あるこそ笑止なれ。豪海詔ふ氣色もなく、左右を見廻し打咳き、豪海「其昔役の優婆塞孔雀明王の咒を主持し鬼神を役し人民の壽命を延し、法流を汲知る者は今の世に恐らく拙僧只一人、此度修法の加持力にて御壽算二百餘歳迄、慥に請合申せし」と廣言放つて言ひ散す。問注所に控へたる朝比奈の三郎するくと走り寄り、豪海が膝元にどつかと坐り、三郎「コレ御坊、某元來武骨者、佛法の有難いも仙術の不思議なも、曾て以て存ぜねども、大かた人の壽命には方量の有るべい物、大食大酒滯事を随分謹み嗜んでも、百年は活にくい、よし又和僧の咒咀で、我君二百餘歳

迄御長生なさるとも、誰あつて其時迄御奉公を仕り、虚か誠の證據には何者が出て立べいぞ、
どうやら護摩の灰臭い。判官殿も旁も、獨鈷仲間の一味らしい」と、頭叩いて嘲笑ふ。かねく
驟合せたる中野の五郎つと出で、五郎「いしくも言れし朝比奈殿、八幡拙者と同腹中、正法に不
思議はない、外法成就の人ならば其段は知ぬ事、命を延るも縮めるも畢竟以ては同じ事、某を
一加持に祈殺して見せられよ、經文の端くれも些と覺えて居る男、驗證なくては信用せず、如
何にく」と詰掛る。豪海些とも悪びれず、豪海「チ、面白しく、邪正一如の宗意なれば善惡
には拘はらじ、望みに任せ其方の命を落して只今、嘲笑を塞がん」と印事々しく結びかけ、神
呪を唱へ眼を閉ぢ暫く觀念する内に、不思議や五郎忽ちに面色變り慄ひ出し、五郎「あら耐がた
や苦しやな、大聖不動明王の索に五體を締付られ、手足も竦み動ず」と眼を見つめ戰慄しは、
不思議と云も餘あり。各是はと仰天し天晴御坊の御法力、方便の御殺生最う此上は御赦免あれ、
縛をも解せ給れと、聲々にこそ詫にける。豪海は打領き、豪海「夫こそ出家の本懐たり、苦痛を
救ひ申さん」と、重ねて印を結びかけ、數珠さらくと押揉ば、五郎即座に起直り、先非を悔む
涙の體、皆々ハット感じ合、頭を垂れて居たりける。朝比奈かつらくと笑ひ、三郎「此義秀がむ
き出した黒い眼を抜うとは、むごたらしい旁、賣僧坊主が行力にてちくとん計朝比奈が、腕先

にても縛つて見よ、然ないと汝大騙一寸も立せじ」と、太刀捻くつて押直る。勢に氣を呑れ豪海左右返答なく、五人の者もうぢく」と片隅欲しき氣色なり。斯とは誰か知せけん和田の義盛驅來り、御前に畏り、義盛君を始め諸歴々御尊敬ある客僧へ、悴に候朝比奈め、持病の我儘差起り、慮外の振舞致す由、千萬恐れ入候。義盛日頃の忠勤に思召かへられて、御赦免あらせ給はれ」と頭を付て言上ある。判官大きに悦んで、判寫ヲ、御尤々々、子を持つてこそ世の中の、親の心は量るれ。法印へは某が幾重にも詫申さん。御子息の我儘も時に取ては武士一疋、浦山しいく。底意を残さぬ證據には、若狭の前が妹に、淺茅と申す乙娘貴殿の嫁に進ぜたい。朝比奈殿を判官が聲に取る儀は成まいか。どうぢやく」と抱いるよ、是も謀の一ツぞと義盛合點行きながら、然あらぬ體に會釋して、義盛出頭無二の能員殿殊更以て我君の、御縁家に繋る事、身に取ての大慶」と、世に嬉しげに領承ある。朝比奈すつと立上り、三郎「ヤア付上るな入道め、今日此頃に漸と取立武士の分際で、聲などとは存在な、口引裂かん」と飛懸るを、義盛中に押隔たり、義盛是非辨へぬ若者哉、汝を聲に取んとは、心に一物有ての事、契約申す義盛も心に一物有ての事。平にく」と嘯けば朝比奈早く合點して、「成程聲に成りませう」三郎「是判官殿随分と、仕拵にお氣張られい、嫁入長持塗箆箆箱貝桶狗張子、部屋の世帯も其方から、味噌鹽薪

米油、其外天壤無上ぢや」と、笑ひて屋敷に歸りけり。頼伽は卯の内よりも、其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結、千幡君と聞えしは、頼家卿の御舍弟にて、今年十二の干支の馬、手綱搔繰り靜々と、春の野懸の乗姿、優しやかに美しく、ほつとりしてしをらしく、實にも武將の嫩とは、名乗てしるき御器量や。山の内の松蔭に暫し御馬を控へられ、谷七郷の繁榮を悠々と眺望ある。茶道坊主の勸齋を近く參れと召寄せて、千鶴「汝は當地の者なれば、此所を以前より鎌倉と名付たる、謂れを定めし知るらん」勸齋「イエ、所には住み候へども名所とも、舊跡とも白河夜舟、又してもうまい所を引起され、鬢作つたり燻べたり困つたる若旦那、語つて聞せ給ひ給へ」千鶴「されば入鹿の大臣とて、猛惡無道の逆臣あり、又大織冠鎌足とて智仁勇を備へたる、忠臣是を悲みて、天神地祇に祈誓をなす、忠貞神にや通じけん、天より一つの鎌ふりしを、これ吉左右と押戴き、歎り寄て入鹿が首、水も堪らず搔落し、それより天下太平の守りの爲と其鎌を、此相州に納し故、鎌倉山と名付たり。なんと目出度い所ではないか」勸齋「ハ、くくく殿様にはいつの間にも左様の事を御存じ有、然らば拙者も覺えたる谷々の名は多けれど、寐もせて君を松葉が谷、耳と口とにさどめが谷、託は盡ぬいづみが谷、憎いかい、ヤ可愛がやつ、のほせばいこふ舐るが谷、すしなやつとて誹るがやつ、折角茶の湯教へ

ても、銀くれるやつ呉れぬやつ、吝いがやつか酷いがやつ、あらまし斯様に候」と、呆言盡せば若君は、氣さくな奴とのお口合、馬上靜に歩ませ行く。東見かどの向ふより、比企の二郎員家、御所よりの歸るさに此所へ來掛りしが、出頭自慢の鼻の先千幡君のお先とも、知ず顔なる咳拂ひ邊を拂ひ打て來る。御近習の若侍つかくと立寄て、侍、ヤア比企殿にて候か、若君のお供先下馬なされいと立塞がる。二郎驚く氣色なく、二郎當時某下馬せん者、武將ならで恐らくは、鎌倉中に覺なし。家來の者共片寄るな、通れ」と云放つ。お先徒士の衆聲々に、小吉ヤア緩意なる詞かな、大樹の御舍弟千幡君眼が見えぬか醉狂か、但しは引摺下さうか、返答聞ん」と罵れば、員家けらくと笑ひ、「眼潰ればお主等よ、我君の小舅辨へ知ば其方より、きつと下馬をば致す筈。若輩人に見許す」と傍若無人に言散し、一鞭あててはいしいと中突割て駈通る。コハ慮外者遁さじと、一度にはらりと抜つれて、追駈んとする所を、若君は聲を上げ、千幡、ヤレ早まらなく、彼等が無禮は頼家の御心よりする事ぞ、大老役を相勤る、和田秩父さへ了簡して、見遁しにする狼藉者、若年の身が言募り、彼めに迷惑致させては、頼家公の御心に、嬉しとは思すまじ、親兄の禮重ければ堪忍するぞ旁よ、必粗相致すな」と道の道たる御一言、御幼稚ながら頼朝の器量の胤を受け給ふ、聰明叡智の生れ付、色には出ず心には、千里の馬も伯樂に逢ねば跛

同然と、世を恨みたる御督、近習の武士も口々に、扱も憎い比企がやつ、いざ追著てきりがやつ、ほつこしもないやつくを、越て屋形に入り給ふ。善悪を身に與らす忠言の、鋤蹴止し島山重忠の屋敷には、賓客車馬の道絶て雨を疑ふ松の風、糸に亂るゝ浅みどり、五柳先生窓に倚り、七松居士が床に伏す、氣色を見せて文机に、文武の眼まくばりて、悠然としておはします。本田の二郎親經、宿直に詰て居たりしが、差寄て小聲になり、親經「今日御所の様子をば未だお耳に達せずや、巨細は確と知らねども、佞人原と朝比奈殿、口論を仕出され鬪諍に及びしを、親父義盛驅付られ、事穩便に納まる上、判官が乙娘義秀に妻すとの、契約迄ありし由、一門廣き和田殿が、悪人徒黨に成れては、やす大事にて候はん。何とぞ御思案廻らされ、此縁組を妨けて、然るべうや」と伺へば、重忠莞爾と打笑ひ、重忠「ハテ吉左右がなく、比企の縁組致せしは義盛天晴發明者、敵の手段を此方の、手段にするが軍書の祕事、おと頼もしき和田殿」と咄の跡もとりあへず、又差向ふ物の本、氣もしんくと澄渡る、夜も閑に裏門を、忍びやかに音づる。親經頼ておつ取太刀、駈寄つて差覗けば、頼家卿の御母君千幡君と只二人、扉の外に立ち給ひ、母君「重忠に對面し、密に尋ぬる事の有り、案内せよ」と宣へば、ハットばかりに立歸り、斯と告れば重忠も、驚き遽て迎に出で、御兩所を勞り上座に誘ひ奉り、其身は遙に押退り、重忠「重

忠お召あるべきを夜陰の御步行、去とは氣遣しく候」と謹んでおはします。母君暫し御涙、御衣を絞らせ給ひつと、母君さればとよ世の中に、自程な憂事の、數々多き者はなし。頼朝卿に別れし時、共に黄泉に赴か、去ずば如何なる山の奥、谷の陰にも世を厭ひ、後世願はんと思ひしに、二人の若に身を繋れ、心にもなく世に立ちて、歎きを重ね日を重ね、漸として頼家に家を譲りて嬉しやと、思ふ甲斐なく此頃は、酒と色とに打亂れ、親の諫を聞ぬから、まして臣下の強異見、憎み疎めば、旁も、出仕を止め給ふに付き、小人共が世に誇り、人を人とも思はずして、今日此若が供先を、乗打せしとは何事ぞや。いかに文盲野人として、刀も腰に帶む身が、主従の禮を知らぬとは、よもや世間へ云れまい。頼朝生てましまさば斯様な不義は致すまじ、後家の子ぞとて侮るのか。武將の弟たる者を、匹夫の馬の蹴上をかけ、衣裳を汚せし無念さを、思ひ量りて給はれ、こさめぐ泣ておはします。重忠横手をちやうと打ち、重忠「古今稀なる狼藉者、狐は虎の威を借るとは、斯様の事を申べき。糺明致すは易けれども、露顯に及ばよ頼家公、政道暗き譏あり、何れを何れと別き難き、御連枝の中なれば、知す顔こそ御慈愛」と、宥め申せば母君は、母君成程其方の云ふ通り、此事のみは、自が、心ひとつに濟もせん。只恨めしきは、頼家が邪曲者に氣を奪はれ、其行末は身を亡し、國をも遂に失ふは、鏡にかけて見る如し、

切て此子を亡人の、形見と思ひ障妨なく、成人さして眺めたし。其方ならでは後見に、頼まんと武士はなきごとよ。日頃の忠義改めず、勞り仕へ給はれ」とお手合すれば重忠、重忠「コハ勿體ない御有様、頼家公のお若氣は、老臣どもが入替り、千度も萬度も諫をいれ、夫にも承引なされずば、お家の爲には換られず、無體に押込參らせて、此若君を守育て、管仲晏子が義を守り、鎌倉三代將軍と、侍き申さば四海の内、靡かぬ草木は候まじ。人數ならぬ奴原は、轍魚の水を慕ふとも、遂には自滅致すべし、お心安かれ母君様。今宵お成の壽に、指古し候へども、畠山が重代を若君に獻上」と、太刀をお前に差置ば、母君顔面打解けて、母君「ヲ、頼もしよ去乍ら、りれうが如き忠臣も、夷の方へ降參し。章邯が勇持たるも、秦を背きし例あり、一心なき神文に、血判あれ」と宣へば、重忠少しえせ笑ひ、重忠「神文誓紙と申す事、武内の大臣の、湯起請より事起り、鐵火を握り或は又、牛王に血をばあへしなど、上古の風儀に候へども、末世は人間邪曲なゆゑ、神も非禮を受け給はず、誓紙の名有て誠なし。義經を僞る土佐坊が、七枚起請の先例など、お家に於て不吉なり。夫までもなく御心を、安め申さん、それ」と詞の下に親經奥の襖を引明れば、朱の鳥居のありくと、八幡宮の額をかけ、鎧を列べ玉垣の、光輝く有様は厳しくぞ見えにけれ。重忠頓て懷中より、一紙の願文取出し、高らかにこそ讀上たり。

忠心標し揃へ

再拜々々、愚臣重忠敬つて申して申さく。それ神道人道正直の一ツを以て建立す。就中正八幡宮は源氏累代應護の尊靈、神に誓ひて面々が約束堅き金鐵の、鎧一領旗指物、寶前に納め奉る。扱若君の御手を取り、一々次第に教へ給ふ。先づ東の第一は御代萬歳の春秋を、重ね櫻や八重櫻、小櫻絨花やかに、射向の袖の白妙に、曇らぬ光久方の、月に星の指物は千葉之介胤直、忠義の弓の一張に、矢竹心の幾度か、敵を欺くやり梅や、烏毛にまがふ鶯の、花に留りし印はそも、坂東の八平氏、時めく武士の名取川、名乗て通る時鳥、卯の花飾る腹巻に、夏の雪かと過たる。團扇の紋は兒玉黨、風にそよぐ吹貫の、梢走りに散り浮ぶ、紅葉流の龍田川、緋緋は岩永黨、五番に見えしは春日野や、紫裾濃の割小札、兜の星の兎きて、眞向肩庇忍の緒、鐘の指物は、信濃の七黨ござんめり。萌黄匂ひの最上方、障子の板の揚巻に、四目結を附たるは、近江源氏の佐々木とは、誰も知らん白糸を、染ぬ心に色と香を、錦がはの胸目綴、鬼の腕を鋭くも、一きは目立つ指物こそ、淺利の與市と御覽ぜよ。扱八番に飾りしは、紺絲緋の胴丸に、總覆輪の筋兜、大簇小簇吹流し、お花流しの染こみは、武藏の國の住人仁田の四郎忠常、

次に列たぶはいつとて、向ふ敵を宇都の宮、好む所の藤繩目、龍虎の指物さしもの敷しき、末座はつぜなれども隠かくれなき、黒草くろくさ織をに金紋かねいづの、二ツ頭のまうたるは、駿河すまがの國の住人ぢゆうじん天智天皇の末孫はつそん、竹の下の孫八左衛門。扱はつざり其外大和源氏美濃侍、近江の國には山本柏木木村姊川、播磨はりまの國には富田高梨赤松黨、伊賀に服部伊勢平氏、三河に足助矢矧武者、出雲に道田河井山、伯耆に詫麻姊輪の一黨、總じて日本國中の侍所武者所、嫡流祖流陪臣迄、末世末代子々孫々、永く源氏の幕下はつかに屬し、不忠の心を扱さまば、神罰しんばつ疑うたがひ有るべからず、今日よりしては重忠が、若君輔佐の臣となり、眼まなこに魏徵ぎしやうが鏡かがみを張り、肱ひじに諫いさめの鼓つづみをかけ、胸むねに批判ひほうの木を抱いだき、美惡びあく邪正じやしやうを手の内に、四海太平くわいはんじやう國繁昌こくはんじやう。漣せみやく、濱なみの眞砂まきは盡つくるとも、源氏の御代みよは盡つきせじと、三べん謠奏うたひかなつれば、母君若君諸共に、悦いさび勇いさみ立たち給たまふ。漢かんの太公たこうきじんけんけつ、慈じあり敬けいあり忠ちゆうありとも、中々なか申まうすばかりはなかりけり。

第二

手車てぐるまの品しなこそ變かはれ源は、清和の流ながれ堰留せきぞりむ、戀の湊みなとに頼家公、色と酒との亂みだれ髪かみ、捌はけ過すぎたる近習きんじゆが、そより上あたる太鼓口たいこぐち、拍子ひやうしに乗のて手車てぐるまの、女房達にようだちはさはくと、殿御とのご一人を宿やどの花、

枝を離れぬ風情にて、太股抓める志ぬく、姿頼れてしどけなき。若狭の局奥よりも、悠々と立
出て、若狭「ナウ申我君様、どう思召すお心ぞ、正體もなき御風情、母君様や北條殿、御耳へ入
ば嘸やさぞ、御嘆かしう覺さん」と、實體つくる風俗の、爪はづれさへ優しけれ。頼家殆ど無
興有り、頼家「總じて女と云ふ者は、子を産むと早や氣が沈る、此界の樂は、色と酒とに極つた。
なんほう富士が名山でも、抱て寝たらば冷たかる、更科の月ぢやとて、左のみ變つた事もなし。
兎角浮世は柔かな、膝と談合」と引寄せて、足擦らせておはします。若狭の前は聲を上げ、「コ
レ申父様、兄様も聞召せ。女の目にさへ餘りたる、取所なきお遊びに、踊り狂うて座ます、こ
な様方の御心底、何とも私は吞込ぬ。一幡君は御幼少、近頃大事の御命ぢや、なぜ御意見を成
れぬ」と、心一杯理を切て、恥しめるこそ道理なれ。判官眼に角を立て、判官入ざる和女の諫言
だて、悋氣の様で見苦い。大將の御榮耀、珍らしい事でもなし、女護の島へ渡らうと、仰られ
ても是非ないに、屋形の内のお慰み、重疊の儀と思うて居る。御意見は此方の役、和女の役は
氣に入る役、やくたいもない事云はずとも、一幡君のおむづかる、奥へく」と睨られて、残
る詞を言へばえに、言ねば胸も乳も張て、悄悄として入給ふ。斯る所へ秩父の六郎重保、披露
も遂ず入來れば、頼家卿も近習も、俄につくる武士行儀、咳拂ひこそ可笑けれ。重保「ア、大事

ないく、些とも御騒ぎ遊ばすな。重忠こそは年に恥ぢ、片意地ばかり申せども、此重保めは我君の、日々夜々の色遊び、御浦山しう存る故、扱こそ推參致せしが、武將共有うする、御器量には去とては、御慰みが小さい」と、氣を持すれば頼家卿、頼家「ム、なんといふ重保、手の變つたる挨拶は、是も意見の色品よな。それとも遊び小さいと、難じて見たる心は如何に」重保さん候、我君の遊樂遊ばす名は高く、見れば女中四五人など、相手に取てのお樂み、大磯狂ひ仕る、小大名より下の事。和田酒盛の昔など、手放した儀が面白い。某熱々存るに、女中の五百〇三百も、お泉水へ追放し、龍宮城の樂みは、如何あらん」と言ひければ、頼家近習口々に、「八幡飲る物好かな、サア〜女中用意あれ。乙姫は美人の由、差詰に若狭の前、それ〜つかめ」と立騒ぐ。重保は小聲になり、重保「イヤ〜子持は寫るまい、その妹の淺茅こそ、比企殿の乙姫、乙姫の名も御容色も、似合しからん」と勸むるを、頼家暫しと御思案あり、頼家「成程淺茅が容色の儀は、聞及んだり去りながら、氣の毒は夜前はや、朝比奈と云ふ男を持つ。あの髭面の意地張者、斯様の事を聞いたらば、鎌倉中を一夜さに、でんぐり返すと云うもの、残念さよ」と宣へば、重保「ア、お氣弱い事ばかり、往昔鳥羽の法皇は、源の仲致が妻女的美質を聞き召し、仙洞に召入れられ、御寵愛あそばされ、祇園女御と是を稱ぶ。其後仲致法皇を、恨むる色の見えけ

れば、官職を削られて隱岐の國へ左遷ある。斯様の例も候へば、一寸一筆御墨付、某に賜はらば、朝比奈に對面し、淺茅を迎へ參らん」と、手に取る様に言ひ放す。判官重ねて、和田秩父同志討さする陷阱、仕濟したりと下笑し、判官ヲ、頼もしいく、娘自慢でなければども、小憎體なる朝比奈には、些と過たと思つて居る」頼むと云ふに頼家も、硯引寄せさらくと、一筆書て賜はれば、重保頓て懷中し、お氣遣遊ばすな、彼奴を云ひ伏せたつた今、御輿を入れて此御所を、目前の龍宮界、珊瑚の枕、瑪瑙の帶、琥珀の盃、眞珠の鍋、人魚の吸物鰐のぬた、魷の一こん焼、孔雀の摺身鳳凰の、玉子のふはくふはと乗る、人心こそ愚なれ。吉日を、三浦の家の御祝言、九十三騎の一門は、云ふに及ばず大小名、出入の町人御用人、御部屋見舞の菓子杉折、蒔繪の文箱紅の、紐解初る花嫁御、淺茅の前と聞えしは、二八に二ツ三ツ計、數へ足したる容色よし、聲の鶯百千鳥、聞て詠めて口吟む、歌の趣向ぞ懐しき。斯る所へ朝比奈は、不興顔して立歸り、三郎エ、嫁入程世にくくな面倒な物はない、外へ出れば髭頬が細つたなどと、夢聊か知らぬ難題云かけられ、あた胸惡さに立歸れば、目結めらが散ばうて、油臭くて頭痛がする。傍八けん寄るまい」と、拳を振れば女房達、逃て奥にぞ走り入る。淺茅の前は立寄りて、淺茅去とは初心な、其様に當言は言ぬ物、嫁入た晩からお側へも、寄らぬといふはあんまり」と、無

念ねんな事ことと抱だ附つけば、三三郎郎「ア、したたるい許ゆるしてくれ、拜まがむく」と逃に廻まるまを、淺あ茅ま「イヤ、人の來こぬうちに、お前に些ちつと無む心しんがある」三三郎郎「サア其無む心しんが嫌きらひ物もの、今日けふは大事だいじの精しやう進しん日び、嫌いやぢや嫌いやぢや」と聲こゑ立たる。淺あ茅ま「スリヤ頼たのむ事こと聞きかぬか」三三郎郎「エ、あたくどい」と振ふ放はなし、駈かけ入いんとする所ところを、淺あ茅まは頓やがて懷ふ中ちゆうより、護まも脇わき差さ取とり出し、既すでに自じ害がいと見みえければ、朝あ比ひ奈な頓やがて抱だき止どめ、三三郎郎「サア品しなに由よつて聞きてくりよ、短たん氣きなる女むすめがある。如何いかにも無む心しん聞きである、ひらにく」と押お止どむ。淺あ茅ま悦よろこび手てを仕つかへ、淺あ茅ま無む心しんと申まうす別べつならず、恥はづかしながら自みづからを、判はん官くわん殿だんの娘むすめとは、偽いつはりにて候まうす」と、云いはせも果はてず朝あ比ひ奈な、三三郎郎「ナニ能よ員いんが子こでない」と云いふ仔しやう細さいは「淺あ茅ま「ア、御ご不ふ審しんは御ご尤よし、誠まことは都みやこ六ろく條じやうの傾けい城じやうにて候まうす、畠はたけ山の重おも保ほ様さま、京きやう詰つめの折せ節せつに、假かりの枕まくらの重おもなりて、仇あだに思おもはぬ中ちゆうなりしを、御ご奉ほう公こうとて是非ぜひもなう、ついで此こゝ國くにへ御ご下くだり有あり、程ほどなう迎むかひのお乗のり物もの、身み請うけも首しゆ尾び能よく相あ濟すんで、いそぐ爰こゝに下くだりしに、思おもひの外ほかな判はん官くわん殿だん、奥おくの一間いっけんに呼よび入いれて、向きやう後こう身み共どもが娘むすめ分ぶん、風ふう俗じやくも更あらためて、諸しよ事じ高かう尙しやうに嗜たしなむべし。和わ田たか秩ち父ふか兩りやう家かの内うち、聲こゑに取とるとの仰おほせ、重おも保ほ様さまに逢あふ事ことも、存なら有ありし効かもなく、此こゝお屋や形かたへ嫁よめ入いは、死しぬべき我わがが時じ節せつなり。お情なさけあらば朝あ比ひ奈な様さま、我わが戀こゝろ人ひとに逢あせて給たへ、頼たのみまする」と泣な居ゐたり。朝あ比ひ奈な覺おぼえず手てを拍たつて、三三郎郎「扱たく巧かくんだりく。コリヤ氣き遣かすな、禍わざひも三さん年ねんおけば役やくに立たつ、身み共どもが女むすめ房ぼう嫌きらひなが、和わ女むすめが爲ため

には大仕合、願ひの通りさつぱりと、埒を明けて其上に、重保と媒介も、此朝比奈」と、言ひも果ぬに奏者番、御上使として畠山六郎殿の御出と、聲々に呼はれば、浅茅はハット立上り、浅茅「サア彼の人が見えました、早う逢せて」と、うろくするを押止め、三郎「某所存有る間、先暫く」と奥へ遣り、式臺にこそ出にけれ。重保上座に押直り、威儀繕ひて云ふ様は、重保「貴殿の内室浅茅姫、容儀優れし其聞え、上聞に達しつゝ、御殿へ召れ御酒宴の御相手にと有る御錠にて、某迎ひに参りたり。きつと御請け申されよ」と、詞鋭く相述る。朝比奈ふつと吹出し、三郎「色狂ひする程あつて、嘘劫の經た狸殿、尾を出せく手も出して、下されませいと降参せい。喰ぬぞく六郎」と、頭を叩いて打笑ふ。重保少し色を變へ、重保「某一生假初にも、虚言言うたる覺がない、疑はしくば御墨附、頂戴あれ」と差出す。義秀ハット立寄つて巻返し繰返し、寸々に引裂て、大太刀半分拔寛け、大聲揚けて、三郎「コリヤ六郎、此お使を承り、うつかと爰に來りしは、三浦一家を侮るのか、但は比企の判官に、眼を剥れたが怖かつたか、所存を聞んと突懸る。重保騒ぐ氣色なく、重保「非道の使者に某が、望んで來るは仔細あり、當時大名多けれど、和田と秩父の兩家こそ、文武の人を指れたる、其義盛が何故に、無道卑劣の判官が、聲に貴殿を致されしは、重保更に呑こまぬ。善惡探り知らん爲、態々推參致したり。忠心變る

事なくば妻女を君へ上られよ、但悪人一味の氣か、有無の返答眞直に、承はらん」と云ひければ、朝比奈顔を和けて、三郎成程得心した。扱なう女房と云ふ者は、一夜でとんと持重り、捨し所を其所此所と、思案して居た眞只中、上意殆ど満足せり。浅茅々々と呼び猛る、聲に従ひ走出で、淺茅、喃六郎様懐しや」と、縋り付てぞ泣きにけり。重保ハツト赤面の、色も聲音も押靜め、重保比企殿のお娘御淺茅の前とは御身よな、如何様世間の沙汰程有り、天晴御器量御容體、我君の御望みも、道理々々と立退くを、淺茅は猶も取縋り、淺茅未練に候御卑怯な、恨が有らば打明けて、なぜ聞えぬと宣はぬ。判官殿に欺られ、憂い月日を送りしも、お前にどうぞ逢うかと、思ふ心の樂みに、今まで生てはありしぞや。誰が怖うてうじくと、見知らぬ顔を仕給ふと、千々に思ひを一口に、云うて歎くぞ道理なり。重保ほうど持扱ひ、返答もなくきよろきよると、溜息ついて居たりけり。義秀立寄り襟元をほとくと打敲き、三郎ぬつくりとした顔付で、怖事して置たな。根本根元聞いて居る、些少には候へ共、女房一疋進上する、三百目とは強請まい。先抱付け嚙付け」と、焦燥がるも可笑けれ。重保莞爾と打笑ひ、重保遠來と仰られ美事の女房賜はりて、千萬大悅仕つる、私宅に於て打置ず、賞翫致し申さん」と、手を引合て立歸るを、朝比奈向うに立塞がり、三郎先待て、一言問ふ事あり。シテ其方は眞實に、女房に

持つか自然又、君へ上うで連行のか」重保「ム、あたらしい詞かな、始に貴殿の内室を、迎ひに來たる某が、今では自分の妻女とて、何と違變が成る物ぞ、只今御所へ連行く」と、聞より中に押隔り、三郎「弓矢八幡そりや成らない、此朝比奈が媒介は、大鎧を數百本、打付たより堅い事、日本國が動しても、びくとも動く事はない、臆病至極の腸が、臍の下へ落著たら、何時にても迎ひに來い、夫迄は身が預る」と、腕押捲れば重保も、氣色を損じ聲荒らけ、三郎「ヤア無禮過た朝比奈、汝が媒介を頼みにて、六郎妻を持つべきか。假にも比企が娘とは、名を聞くさへも穢はしい、さつぱりと縁切たぞ」三郎「チ、去らば去れ、此上は朝比奈が女房にする」重保「イヤ御詫意ぢや連て行く」三郎「ナンヂヤ實正請取るか」重保「スリヤ何分にも渡さぬか」ヤルマイ渡せヤルマイと、互に詞詰合うて、鏝元寛け立寄れば、淺茅は左右に取付て、淺茅「詮ない事にお命を、果し給ふか情なや、自跡を暗して、屋形に見えぬと有るならば、お二人様は我君へ、申譯こそ立つべけれ。時節を待て判官と、親子の縁を切たなら、心變ず六郎様、女夫に成つて給はれ」と、涙なからに立出れば、兩人ハット感じつと、重保「出來したり神妙なり、今出て行くは知らぬ分、夫婦の縁は切た分、此屋形をば缺落分、朝比奈殿の分も立つ」三郎「貴殿の分も立つである」重保「如何にもく」三郎「去らば」重保「去らば」去はくと三方へ、別れ行く身ぞ切なけれ。藝として爲

ざる事なき樂みは、富貴のかくの癖とかや。斯くて御所には重保が、遅参いかごと夕暮の、鞠場に騒ぐ女中鳥、こだまの響く大廣間、弓鎗計役目とて、立列びたる氣色なり。然るに和田の義盛は、黒縁の乗物を、立關深く昇据させ、義盛「誰ぞ御取次頼ましよ、頼みませう」と言入る。中野五郎立出て、五郎「ヤア珍しの和田殿、何故御出仕あられしぞ」義盛「サレバ上意の旨を受け、朝比奈が最愛召連れて参つたり、宜く御披露頼みます」五郎「テ、御大儀く、追付て御對面あるべし」と、奥へ入らんとする所へ、畠山の重忠、是も蒔繪の乗物を、お次の間まで昇入れさせ、重忠「コレ中野殿、お取次頼みまする」と聲かくる。五郎「ハア是はく重忠殿、貴殿も御出仕有りしよな」重忠「然ればとよ忤重保め、上意を受けて朝比奈の、妻女を伴ふ途中より、俄に邪氣に當られて、身心悩み候故、遅参を憚り、某誘引致し候段、御披露頼む」と云ひければ、中野合點はゆかねども、咎だてして拗者等に、したよかなめに逢うかと、「成程承知した」と、御前を指て走り行く。義盛顔をさし寄せて、義盛「ナウ重忠、朝比奈が女房は此乗物の内に居る、御自分同道致されし、其乗物は何者ぞ」重忠「莞爾と打笑ひ、重忠「其方にも朝比奈の内室伴ひ給ふとは、慥に見届け罷在る、此方も又朝比奈の妻女をば連れ参つた。如何様武士の魂は割符を合す様な物、合ば仕合違うたら、その時互に改めう」義盛「ハ、ハ、ハ、ハ、秩父成程尤ぢや、追付

割符わりふが知れう物、然らばお尋ね申すまい」ハテ扱後程々々と、互たがひに尻目しりめ遣合つかあひ、物をも言はず控ひかへたり。斯くと聞くより頼家卿、頓やがて廣間ひろまに御出あり、義盛よしか此方こなたへくと、仰したがに従したがひ乗物を、手繰たぐり々々に昇出かきいづれば、大將うかう浮れ出給うかひつよ、「籠かごの鳥とは恨うらめしい、妾めかけをちよつと水鳥みづどりを、飛とばせ飛せ」と御意ごいを受け、義盛よしか頓やがて乗物より、黒革くろがわ緞たふしの鎧よろひを出し御前ごぜんに指置さしおて、謹かしこんで畏おそる。君きみを初はじめ近習じゆぎも共どもこは抑おさ如何いかにと呆あれつよ、きよろくとして居ゐたりけり。義盛よしか顔かほを振ふり上げて、義盛よしか「ハア心得かこぬ旁かたわらかな、朝比奈あそが最愛さいあいを御所望ごしょぼうと有ある御墨おすみ附つき、重保じゆうほ上意じやういを述のせられし、惣そうじて武上ぶじやうの最愛さいあいは、弓鎗ゆみやり小太刀せうたう薙刀なぎたうなど、色品いろしな數多あまた候まをへども、悴せがれに候朝比奈あそは、度々たびたびの先驅さきがけ矢軍やぐんに、裏うらをもかへさぬ鎧よろひとて、親おやより子こより兄弟けいだいより、別わかて最愛さいあい致いたす故ゆゑ、中々ちやうちやう惜おしみ申まをせども、上意じやういを如何いかで背そむかんと、無體むたいに持參ぢきん致いたせしが、若わし粗相そさうばし候まをか」と、然さあらぬ體ていにあいしらふ。頼家たの赫かつと赤面せきめんあり、頼家たの汝等なんぢら今日けふ來きる事こと、素直すなはの所存しよせんに有あるまじと、先達さきだつて推量すゐりやうせり。重忠じゆうちゆうが慮外りよぐわいをも序ついでに聞きて遊あそばん」と宣のたまふ内に乗物のりものを、同じく手繰たぐりに昇入かきいれて、白銀しろがねの猫取ねことり出し、御膝おんひざもと元に差置さしおて、其身みは遙はるかに押退おしすきり、重忠じゆうちゆう是こゝは先年せんねん頼朝たのちゆう卿けい、西行さいぎやう法師ぼうしに下くだされし、銀猫ぎんねこにて候まをを、修行しゆぎやうの旅たびの妨さまたけとて、門前かどまへの童わらんぼに投なげやりて通とほりしを、縁えんを求もとめて某たれが、家いへの祕藏ひそくに仕つかる。承うければ我君わがきみは、朝比奈あそが妻女つまめをば、無體むたいの戀慕れんぼあそばす由よし、彼かの女儀めがたも出し生しゅうは、京堀川きやうぼりがわの遊女うでめの由よし、實けや世上じやうじやうの

諺に、猫には遊女が成るとやら、承つて候へば、何れを寵愛なさるよも、さして變らぬ儀と存じ、獻上致し候」と、眞顔作つて言上ある。比企の員家つよと出で、員家「扱々旁骨折て、巧み出された事ながら、外の目からは出来過ぎ。言ば武將の御身にて、是しきの御慰み、有まい儀とも申されず。其上朝比奈女房は、親判官が乙娘、若狭の局の妹を、遊女なんぞと言ひ落し、猫の或は鎧のとて、我君を嘲るは、兩人共に反逆と、睨んだ眼は違ふまい、返答聞かん」と罵れば、重忠カラくくと笑ひ、重忠「ナニ我々が逆心とは、古秦の趙高が鹿をば馬と争ひて、世を傾けし故事なんど、聞はつよとの咎めよな。それは悪人此方は、忠義の鎧讒人の、鼠を取らする猫なるぞ。随分用心あられい」と、空嘯いて在します。頼家甚だ立腹あり、頼家「ヤア推參なり汝等、諫は臣の道なれど、若年者と侮つて、嘲弄するこそ奇怪なり。二度對面叶はぬぞ、其所立去れ」と宣へば、兩人聲を打揃へ、盛盛、重忠「ナウ御勘氣とは曲もなや、主君は二代我々父子、元曆治承の昔より、建仁正治の當代迄、身は泰山に倚懸り、命は鷲毛に等くて、奉公怠る事なければ、追放たるよ覺えなし。諫の詞は苦けれども、身を助くるの良藥にて、詔ふ辯は甘けれども、命を滅す毒草とは、夢聊かも御存じなく、忠臣は遠ざけられ、佞媚の族が勧めに寄り、翠庭の柳腰、さんこくゑんりの花の顔、酒宴妓樂にお目眩み、心を奪はれ給ふ事、お笑止や情なや。三仁去つ

て殷空しく、范増死して楚は亡びし。兩人蟄居致しなば、土屋北條土肥岡崎、新田佐々木千葉上總、其外名有る諸大名、頼みなき世を憤ほり、皆分國に引籠り、讒臣奸人時を得て、禍必ず蕭牆より、忽ち起つて萬代の、源氏のお家の恥辱となり、君萬歳のお命も、亡し給はん、淺間しや」と、秩父はお袖に取付けば、和田は疊を打敲き、諫言實に道理なり。頼家左右の返答なく、扣ふる袖を振放ち、殿中深く入り給ふ。二人は溜息はつとつぎ、「實に良禽は木を擇ぶ、賢人は師を擇ぶ、愚將と知らで今日迄、仕へし事の後悔さよ。廣言憎しと聞き給ひ、重ねて討手給はらば、潔よく腹切て、臣下の手本にせんもの」と、悄悄立つて歸らるよ。近習の者共聲々に、「ヤア後れたる人々かな、君を恨みて腹切るに、所撰みは無い筈ぞ、所望々々」と取捲て、スハ事こそと見る所に、重保朝比奈龍象の、浪を蹴立る如くにて、一文字に斬來り、大太刀振て立懸れば、詞にも似ず我一と、逃て御殿に走り入る。義秀猶も怒りをなし、三郎しや物々し愚人めら、帝釋天の威を藉て、喜見城に籠るとも、朝比奈手くせの門破り、捻り殺して捨つべし」と、兩人御殿へ駈入るを、和田も秩父も取付て、重忠、義盛、ヤレ逸まるな若者共、三度諫めて容られねば、身を退くは君子の道、首陽の蕨に世を凌ぎ、涓濱に釣を樂まば、鎌倉計りに日は照るまい。御殿へ向うて慮外すな、ヤレ待て〜」と引止る、秩父は伯夷が仁を説き、和田は四皓が義を守る、

重保朝比奈兩人は、かうせいようが刺客の、猛きを寫す虎の髭、獅子の吠ゆるが如くにて、往つ戻りつ飛返り、踊り狂ひし有様は、須彌勃海を跨りし、りやうはくこうの勢も、是にはいかで勝らんと、見る人聞く人今の世に、語りて共に興じける。

第三

唐土に優りし物は何々ぞ、京羽二重と大名の、お道具持の造り髭、揃うて、徒士の衆、手を振る腦振る烏毛振る、鶴が岡への御參詣、先驅後乗きらめきて、光を三つの大鳥居、だん葛の松蔭に、御乗物を昇据れば、乳人おはした立かより、高麗の飴仙家の蜜、龍眼肉ともてかしづく、御果報日本一幡君、實生を出すは帚木や、若狭の局當年は、お厄年とぞ白重、薄紅梅の袖匂ふ、柳が枝に初櫻、咲せて見せる景色なり。後乗滑川四五右衛門、二重の腰も奉公の、七重に折りて若君の御前に膝まづき、滑川殿御怠屈成れたか、もう追付で御座るぞや。八幡様へも厄神へも、手々を合せてのよ様と、仰しやると早今の間に、お背がによんによと伸まする。取わけて今日は、放下もあり能もあり、くも舞あやをり八ちやうがね、鳥追萬歳大黒舞、見せましたならてつきりと、館へ往のとはおつしやるまい。久しい事ぢやかと様の、お腰がな痛みまし

よ、爺めが膝へ乗せませう、お出なされ」と愛すれば、「イヤ〜此處が面白い、いつもの様な切合しよ、爺も人形を持て出い、はやう〜」と大將の、わやくは心廣かりし。増川「サア切合も仕ましょが、あれ〜あそこを見さつしやれ、西から南へ押渡で、漫々たる大海も、おつくるめて若殿の、お泉水も同じ事、鯛も有り海老も有り、鯉節の生たのが、ひち〜と齧まする、連立て往て見せましょ」と、紛らかせ共、「イヤ〜、おれは切合々々」と、お膝元なる辨慶人形、鉞持て禿頭、こつりと鳴れば、「アイタシコ、八幡堪忍ならない」と、心得て持つ懐中人形巴女が大長刀、エイヤツトウ〜エイヤツトウ、如何はしけん若君の、人形碎け落ければ、母様大事の辨慶を、爺めが此様に仕をつた」と、むづかり給へば母君や、女房達は入かはり、賺せどきかぬ〜とて、泣入り〜仕給ふに、うろ〜涙に四五右衛門、「若君堪へて下さりませ、今年ちやうど四十年、御奉公仕れど、か様に不覺仕らぬ、正八幡も照覽あれ、企んでは致さぬこと、幼き人に誓言も、實體過ぎて笑しけれ。

烏追大黒舞

「やんら目出たややんら樂しや、千町や萬町の烏追が參つた、福の神を祝ひ込めしらけも米やろ、

ましらけも米よなやる、よねやろがぢやうには福と徳と參つて、宿やどかろと申す。宿借候はど殿やども榮さかえ候、我身も榮え候、大黒舞を見さいな、福大黒見さいな大黒く。大黒と申すは大唐の人ならず、天竺てんぢくの人ならず、住吉すみよしの角すみの方に炭屋を仕して居ゐられた。夫それで色が黒くろいはやらんら樂しや、やらんら目出たや、大黒舞を見さいな、福大黒を見さいな誰人たれひとの誰たれやろ、左大臣に右大臣、關白殿のお手かけぢや大黒と申すはく、角前すみまへ髪かみの昔むかしより夜這よひびき好ずきなお人で、あちらの角すみでもちよこく、こちらすまの角すみでもちよこく、角々すみぐでちよこるとて、炭消すみけしに躓つまずいて、夫それでお色が黒くろいは「コレ大黒舞、疾さうとと彼方あちうへ退のいてたも、烏追歌うりおつたの邪魔じやまになる」「ホ、くなめたりく、女の口から烏追とは、いかなる君が烏追ぞ。色の黒くろいがお好ずきなら大黒舞も相あひ作はせう」「ハ、くくく、有あり様やうがわしや傾城けいせいぢやが、様子ようすが有あつて此通り、今日けふ烏追の水みづ上あひぢや」「ハイいはれを聞きば面白おもしろや、身共みどもとても浪人なみのり者もの、妹いもの傾城けいせいに何卒なにぞ巡めぐり逢あひ逢ひ、大黒の今いまぶきぢや、あんまり退のいた中なかでもない、なんと一所いこに行いまいか」「成程なるほど々々くそうしましよ。さあ大黒舞やらつしやれ」先まづこなたから諺ことわざはつしやれ」「やらんら目出たや、やらんら樂たのしや」四五右衛門聲ごゑをかけ、澤川さわがわ「コリヤく、烏追大黒舞、よい所へ參つた故ゆゑ、和子わこの御機嫌ごきげん直ただされて、皷腹つづはら一つ助たすかつた。とてももの事に今いま一節ひとしよ、お慰なぐさめ申まうてくれ」烏追うりお「コレハ有あり難がたいお詞ことばを聞きまする、お望もちみと有あからは、傾城けいせいの身の上みの上を、烏追うりおにして諺ことわざひましよ。

やんら目出たや、やんら樂しや、千兩の萬兩の身請客が參つた、比企の家に祝ひ米、姉御もよねやろ、妹御もよねやろ、よねやろがぢやうには、慾と惡と巧んで嫁らそと申す、よめらし候へば比企も榮え候、我が身も榮え候、嫁らす處とは誰人の誰やろ、和田殿に秩父殿、大將軍のお手かけぢや、御代の盛りとは若殿の御祝」歌や心に懸りけん、若狭の局顔さし出し、よくく見れば都にて、同じ流れを勤めたる、妹女郎の八千代なり。何故斯る身の上と、問ひ度も有り淺茅も又、語りたさに來れ共、人目を忍ぶ粹同士の、顔と顔とに知せあふ、夫さへ有るに大黒舞、面引取れば是はそも、兄の花垣伊織之介、あら懐しや戀しやと、飛付く程に思へ共、若君の爲比企殿の、身の仇とこそ成べきと、急來る胸を押鎮め、若狭「ヤイそこな大黒舞、おぬしは寵相な、當り障りに成る事を、必らず云ふな諺ふな」と、詞は下けて心には、戴きまする兄様と、知らせませ欲しき風情なり。四五右衛門氣もつかず、滑川大黒舞も何なりと面白う申ませ」伊織はじつと會釋して、伊織「然らば拙者も身の上を、お慰みに申ましょ。大黒々々ならず者の大黒、大黒と申は天然の人でなし、上京の素浪人、爺が一せん荒金の、槌で打ても金は出さず、乗るべき俵持ざれば、米に妹を代なして、それで親子暮した、さつても哀れな大黒、左れば果報は知れぬ物、米に賣た妹が、此國の殿様の奥様になつたけな、左らば無心を云はうと、旅立の大黒、さつても

穢い大黒、大黒舞を見さいな、むさ大黒見さいな。大黒の能には、一ちに妹が見ぬ顔で、二に悪い根性で、三に左あらぬ面をして、四つよい物著張つて、五ついつかい氣色で、六つむさいけしんで、七つ何が惜うて、八つ厄介嫌ひをる、九つ此方を得向ひで、十で吐胸つきをつた。扱も惨い大黒様子知らねば、四五右衛門肩身揺りて打領づき、滑川嘸々腹が立ち申そ、扱々々々妹めは、言語道斷悪くい女郎、當分榮花に誇る共、何の將來善んべい。そんな不義奴此方から、勘當をぶち切て、若い花ぢや立身の、思案仕覺を仕召されい、近頃侮づりがましいが御合力申すつとて、腰を探つて百の錢、轉りと傍へ投やれば、ハット計りに押戴き、伊織冥加に餘りし御合力、逆もの事に此錢を、妹が面へ投たい」と、恨みを含む目の内に、餘る涙ぞ道理なる。若狭も今は人目にも、餘る難儀の色見えて、四五右衛門に差向ひ、若狭「其方はようぞ氣が付た、貰ふ者より妹が、蔭で聞たら嬉しかろ」滑川「イエいかな事く、悦ぶ事は扱置て、戯けた老爺と笑ひましょ」若狭「ハテナうさうは云はぬ物、他人の目にさへ淺間しき、見る影もなき姿形、妹は身にも命にも、替へて苦しう思ふらん。され共若しは國の爲、家の爲又子孫の爲、三ツを一ツに絡めたる、切ない義理の有る故に、一人の兄に憂い共、犬畜生と云はれても、名乗らぬ妹が心かと、他人の我身に引當て、思ひやるさへ魂も、消ゆる計に悲しや」と、餘所目は餘所の涙川、

沈むは頼て我身なり。取亂しては叶はじと、形を作り居直りて、「よし無き事に暇取つて、上や
晩しと待給はん、鳥追ひ計りは若君の、お伽に屋形へ召連ん、大黒舞は立歸れ」と、輿の戸はた
と鎖し給へば、「ソレお乗物やりませい」ハツト答て行列の、足もしとく過行けば、伊織之介大
音上げ、伊織「若狭の局よつく聞け、嫌はど兄には成るまいが、たつた一言人知れず、問はで叶はぬ
こと有つて、形を窺し様を替へ、漸々巡り遇たるぞ、一夜は屋形へ連れて行け、若狭の局、妹」と、
人目も云はず呼吼れば、笠原太郎斷戻り、笠原何とも成らぬ横道者、若狭の局の御事は、比企
の判官能員とて、お大名の親里あり、何者に頼まれて、斯る慮外を吐出す、白狀する迄家來共、
それ打敵け」と罵しれば、伊織「ヤア麓忽ばし成さるよな、容こそ微祿致したれ、心は花垣伊織
之介、棒の先でも當たらば、八幡堪忍致さぬ」と、反打かけて氣色する。笠原元より武骨者、「瘦
浪人の腕すんばい、叩き落せ」と下知せられ、追取巻て打けるは、笑止と云ふも餘りあり。若狭
の局身を悶き、若狭「ヤレ麓忽すな早まるな、廣い世界に同じ名の、有まい物でなき物を、堪へて
往せ浪人も、蟲を死なせて逃て去ね。ヤレ逃け逃がせ」と聲を上げ、あせり給へど心なき、雜人
原は聞入ず、起れば敲き立てば打ち、落花狼藉花垣と、どつと笑う、入にけり。無慘やな伊織之
介、聲を計りに泣叫び、伊織「エ、胴慾者妹め、此體を見て能もく、打捨ては歸るよな。命の

内に此の懐み、おのれ晴さで置うか」と、悄悄立て行く袖や、紙子もちぎれ頭巾さへ、行方も知らぬ大黒舞、打出の小槌現なき、身の行末こそ覺束な。玉しける家に住む身は物思ひ、知らで貌さへ形さへ、若狭の局とは、名にこそ立れ人知らぬ、下の歎きに消えかへる、雪見の亭に立出て、淺茅を近く招き寄せ、若狭「扱々久しや懐しや、ほのかに聞しは和女にも、判官殿の情にて、朝比奈を殿御に持ち、侍かるゝに沙汰せしが、思ひの外の姿形、氣遣しや」とのたまへば、淺茅は暫し涙ぐみ、淺茅問るよさへも恥かしき、あだに果敢なき身の上を、哀れと思し給へかし。勤めを致す折からに、重保様と云ひ交す、深き中をばひき裂れ、思ひも寄らぬ和田殿へ、嫁入て往たる其晩は、恐ろしいやら悲しいやら、現心もなかりしに、武道を磨く朝比奈殿、事の道理を聞分けて、重保様とお出合に、變らぬ中の縁結び、御取持に預りしを、父御に劣らぬ堅意氣で、惡逆無道の判官が、娘とあれば添はれぬと、願みもなき御返事故、然らば親子の縁切つて、其上添うて給はれと、詞を詰て別れしが、工の多き判官に、逢うて云ふのも氣味悪く、傳を求めて頼まうも、お前ならではなき故に、今日物詣を幸ひに、道に待受け候」と、しをくとして語りける。若狭「扱なう左様な事ぞとは、夢聊かも知らざりし。いとしや苦勞しやつたの。遠慮がましい今迄に、なぜ談合はし給はぬ。氣強う思や親と子の、縁が切りたか切らしてやる。

それまでもない自らが、思案一つで添はしてやる。昔は勤の兄弟分、今改めて眞實の、姉を
 持つたと思つてるや。嫁入も自らがさせませう、化粧田に卅町、一幡君の伯母上を、重保妻に
 遣はすと、使を以て云はせたら、秩父殿で御座らうが、否ぢやと云うて御覽うじやれ、ア、慮
 外ながら」と時にあふ、人の詞ぞ頼もしき。淺茅はハット手を合せ、淺茅そんならお前は姉様
 か、此若君は甥子か」と、髪を搔撫抱き上げ、今は心も落付て、お庭のかよりお物數寄、谷七
 郷を手の下に、見越の堀の馬場先を、引つれ来る大名は、何十人と知らね共、色の黒いは朝比
 奈殿、御器量よしは重保様、不思議や今朝の大黒舞、本田が肩に打かゝり、此處へ來ますと云
 ければ、ハット計に驚きて、若狹も立て見おろせば、無慘や花垣伊織之介、顔も手足も、疵つきて
 身に添ふ物も切れぐにて、諸大名に引添うて、評定所にこそ入にける。コハそも何の詮議
 ぞと、納め兼ねたる胸騒ぎ、若狹「ナウ姥もおぢや誰も來い、今朝の様子は知る通り、大黒舞も
 浪人とや、打敵かれたる口惜さに、人を過めし物ならん、賤しき形と云ひながら、一幡君へ一
 度でも、お目見え致せし者なれば、相手はどなたで有うとも、品によつたら自らが、肩を持ま
 い物でもない。次の間へ往て聞ておぢや、ヤレゆけ」とせり立て、詞は強心には、如何
 なる罪を仕出して、憂目に逢せ給ふぞと、立て見居て見うろくと、案じ入りたる氣色なり。腰

元二人立歸り、腰云「大黒舞は何者やら、秩父殿を一番に、諸大名衆が最良して、相手は比企の判官様、仔細は未だ知れませぬ」若狭「ヤレ取わけて氣遣ひな、またゆけく」と追ひ遣りて、胸に手を置き思案して、最早大事に成つて來た、確な事を見ぬうちは、秩父が取持つものでなし、腹立紛れに兄様の、如何なる事か宣ひて、我憂名をや流さんと、忍び涙ぞ道理なる。乳人の松代遠たどしく、走り歸りて云様は、松代「いや早興の醒めた事、朝比奈殿へお嫁入の判官様の娘御は、京六條の遊女ぢやと、和田殿からは宣ふを、判官様は眞實の娘とあるの争ひを、秩父殿が中へ出て、一つ二つのたまふと、判官様が轉りと負け、親でない子でないとの誓言の上にて、朝比奈殿のお内儀が、秩父殿へ貰はれて、此一埒はさらりと濟み、跡がお前の詮議ぢやけな、聞て參ろ」と走り行く。淺茅は心いそくと、淺茅「姉様最早御苦勞に、成さるゝ事は入りませぬ、重保様の女房と、私には札が附いたれど、お前の事が氣遣ひ」と、案じ顔こそ優しけれ。若狭はハット泣出し、若狭「ナウ浦山しの淺茅やな、扱淺まし身の身の上や。實に世の中は飛鳥川、變る淵瀬と聞しかど、二人が中を今の間に、早く歎きと悦びの、替る物とは知らざりし。何を隠さん最前の、大黒舞こそ自らが、誠の兄にて候ぞや。傾城の身の習ひとて、賤しき兄を持たるが、差て恥にはあらねども、判官が娘こそ、君の寵愛淺からず、一幡君を儲しとは、日本六十六

國には、知らぬ者としてよもあらじ、諸國の大小名に若狭の局と侍かれ、榮花を見るは君の恩、
 元の根ざしは判官の、悪にもあれ善にもあれ、須彌より高き恩ぞかし。去とて誠の親兄を、仇
 に思ふに無けれど、一幡君の一門に、大黒舞と云はれんは、暇ある玉の如くにて、親子の光
 は消失せん、親子の光失せたらば、判官一家は滅ぼされん。逆心募る天罰にて、外の口より
 知るよとも、恩をば仇で報すべき、道理は更に無きものを。いまこそ情無く過ぐるとも、若君
 御代を嗣ぎ給はど、心の儘に親兄へ、御孝行申さんと、思ふ心の一筋を、神ならぬ身は御存じ
 なく、見捨て歸る恨みと云ひ、打ち敲かれたる無念さに、訴人に出させ給ふこと、恨みと更に思
 はれず 正直路な四五右衛門、我身の上と知らずして、扱々悪くい妹めぢや、將來が能うある
 まいと、云ひしは胸に應へしが、早く報いの來りしと、思ひ出すさへ淺まし」と、聲を上げてぞ
 泣き給ふ。淺茅も左右涙のみ、應答もやらで居る内に、二人の腰元立戻り、胸押撫て息をつぎ、
 腰元「御身の上を唯今が、大黒舞と判官殿、角め要めの受答、秩父殿の仰せには、お前が遊女
 に極まらば、賤しき腹に若君は、よもや胎らせ給ふまい。取替子でも致したか、負けものかの
 二つの内、一幡君も門前より、大黒舞の面を著せ、追ひ拂はんとの御評定、若も左様に成たら
 ば、こち等は何と成べき」と、縋り付てぞ泣出す。若狭の局聲を上げ、書紙「聞しにも似ぬ重忠

が、今の詞の愚かやな、天下の鑑と云はるれど、流石は吾妻戎にて、武道は知れど文は無く、花は有れども實を結ぶ、辨へさへもなかるらん。后高位の御身にも、徒ら有し噂もあり、海女の腹から大臣の、生れ給ひし例もあり、傾城遊女の胎内に、大將の子が胎らぬとは、なんの書物で見出し、泥の中より生出る、蓮より猶美くしき、花の顔面白露の、玉よりけなる若君を、追失なはんと云ふ事は、忠義か扱は逆心か。源氏を守りの御神は、など餘所に見てお在ます、頼家卿の御運さへ、末になつたか悲や」と、咽返りく、わつと叫ばせ給ひける。涙の中に若君を、膝元近く引寄せて、若狭果報拙くましくて、賤しき母が腹よりも、生れ給ふが淺まじや。稚く渡り給ふとも、只今母が云ふ事を、篤りと能う聞き給へ。大將の子と云ふものは、死ぬべき時に死なざれば、人の笑ひを受くるぞや。母が詞を懸けたらば、此守刀にて咽の邊を突貫ぬき、頼家卿の胤と有る、證を見せて母が身の、恥辱を雪ぎ給はれ」と、云含めれば一幡君、わろびれ給ふ氣色なく、「一幡腹十文字に切らうか」と、莞爾と笑める稚顔、見るに目もくれ心消え、抱き付てぞ歎かるよ。淺茅暫しと押し止め、淺茅ア、道理やさりながら、二度の便りに跡先の、詞の違ふ所あり、傾城の名も假親も、變らぬ姉と妹を、我は秩父の嫁にして、お前を若君諸共に、追失なはん様はなし。浮くも沈むも同じ世に、今より誠の兄弟ぞ、甥子と契り初

めたる、詞はいかで違ふべき、篤と様子を聞届け、死で叶はぬ道ならば、跡にはなとか残るべき、三つ瀬の川を諸共に、手を引いてこそ渡らめ」と、諫合ふこそ優しけれ。若狭の局顔を上げ、若狭「なう嬉しの人の詞や、七度結びて姉となり、六度契りて妹となる、それは誠の兄弟よ、是は今日しも假初に、云ひ交したる契りとて、一所と迄にのたまふは、先の世よりの約束と、思ひ遣るさへ睦まじき、眞實覺悟極めてか」淺茅ア、愚なる仰せやな、武士の性根は時に依り、味方が敵に裏返る、例しはあれど傾城の、言替したる心底は、違へぬと云ふ手本は、末世の人に見せう物、急せ給ふな姉様「怯れを見せな妹」と、互に顔を見合せて、莞爾と笑ひつ泣きもしつ、死を待つ内ぞせつなけれ。斯る所へばたくと、乳人腰元駈戻り、腰元「なう喜び成されませ、判官殿利潤に成り、大黒舞は大驅、由井が濱にて御刑罰、仰せ付られ候」と、きほひ懸れば兄弟は、命を延る喜びの、中に歎を引出す、伊織之介が縛めを、本田の次郎繩取にて、屠所の羊の引綱や、隙行駒の足元も、よろりくと行く道を、若狭はわつと泣倒れ、又起上り「あれくく、あれなう兄様々々」と、聲からしたる呼子鳥、浮川竹につらなれる、枝を放れし鶯や、子は子なりけり時鳥、悦びのうら歎のうら、恨を誰に由井が濱、波なき方に立波の、袖の裏とは兄弟が、身の上こそ知られけれ。

第 四 若狭の局道行

嬉しとは昔ぞ詠し星月夜、明くる詫しき鎌倉の、御所の御門の七重八重、越えつ忍びつ隠ろい
つ、若狭の局妹は、浅茅と云へど淺からぬ、思ひは一つ二人連、現心も亂ればし、一幡君が今
も猶、母に添寐の夢や見ん、寐顔脇顔笑ひ顔、目にちらつきて身を去らぬ、袖と袂のうらく、
に、涕碎けて音無し、瀧の白絲、絲による、物ならなくに別路の、心細くも夜の道、迷ひ來る
身がやつ過ぎて、春まだ寒し雪の下、積る思ひに哀別離苦の、理しるき曙や、東光山の鐘の
聲、別れを歎く人有れば、眠りを覺す法の友、親同胞は遠近に、堇蕘も名のみして、霜の芝
道踏しだく、紅匂ふ空燼に、誰待宵の侍従川、寄せては返へる白波の、ふじが谷とはあれや
らん、一刷毛さつと横雲は、誰筆染て隈どりて、四季の詠めもとことはに、代々を重ねし鶴が
岡、こよはやれ何處ぞと道人に問へば、此處は坂川辻町ぢやとさ、心ばかりは由井が濱、つら
なる枝を打つ波の、胸に答へて身に懸る、責て空しき骸にだに、行合川の丸木橋、踏は返へさじ
一筋に、千代の例しの細石、無き名の數や數ふらん。無常を告ぐる野鳥の、聲も鋭き松蔭に、
暫らく休らひ給ひける。梟は寐に行く鳩は起て出るとかや、明けなんとして玉鉾の、道まだ闇

き岸陰かしかげに、高札かうさつ立てて高提燈たかていとう、さし寄よりて見給へば、若狹わかつ「何々若狹の局が兄、花垣伊織と云ふ者、上を偽いつはりり掠さらめし故、刑罰けいばつに行ふ」と、讀よも終おわらず此所こゝ其所そこと、見渡みわたす向むかふに獄門ごくもんの、顔は知らねどそれとのみ、するくくと走り寄より、若狹わかつ「なう浅あまししの御姿おすがたや、人をも害あやめ盗ぬすみをし、重おもき科が有あるものこそは、斯うる憂目うきめに逢あふと聞きけ、ありの儘ままなる有あり事を、云いひも開あかてやみくくと、非道ひだうの掟おきてに逢あひ給たまふ。是と云ふのも自みづから、名乗なりのて出でぬ誤あやりを、百千萬の言譯ごんごも、今では甲斐も渚なみ漕こぐ、蟹あまの小舟せうねのこが來きて、せめて最期さいごの御顔おんかほを、拜ままんとこそ思おもひしに、早くも變はる兄上の、御おん佛おほか」と計はかりにて、二人は其所そこに倒たれ伏ふし、泣なくより外ほかの事ことぞなき。本田の次郎親經じらうしんけい、夫それとは知しれど知らぬ顔かほ、親經しんけい「ヤイく女寄よるまいぞ、言語ごんごに餘ある大罪人たいざいじん、首くびなと盗ぬすみ取とらんかと、本田が番ばんを相勤あいきんむ、はやく歸かへれ」と云いひければ、二人は頓やがて起直たり、若狹わかつ「ハア秩父ちちぶが家來けらいの本田ほんだよな、我われこそ若狹の局きょなり。是これなるは又淺茅あさぢとて、汝なが主人重保しゅへうが、様子ようすは知しつてゐる女。就すなはちては彼あれなる高札かうさつに、心得こころえ難がたき事ことこそあれ、詮議せんぎが闇くらい狼狽うろたへた、秩父ちちぶに是これへ參まれと云いへ、尋たずねん」と宣のたまへば、親經しんけいハット畏おそり、親經しんけい驚おどき入いたる仕合しあかな、扱あつ又詮議せんぎの筋すぢに付つき、何か御不審おんふしん候まうよし、重思しんし召めいにも及およばぬ事こと、憚はやりながら拙者しよめが、申開まき候まうはん、御尋おんたずねあれ」と領承りやうじやうす。若狹わかつ「ム、何なにといふ其方そのかたが、主人しゅじんに代かつて返答へんたとや、只今尋ただいまぬる色品いろしなを、若わし言譯ごんごに詰つりたら、まああの

如く汝が首、獄門の木に曝すぞよ、心を鎮め能つく聞け。あの高札に若狭の局が兄伊織之介と書付しは、確かな證據あるならん、然る上には彼の者を、上を偽り掠めしとて、なぜ刑罪には行うたぞ。但し偽り者ならば、若狭の兄とはなぜ書たぞ。二つに一つは重忠が、誤りにても有るまいか、返答聞かん」と宣へば、親經莞爾と打笑ひ、親經「云うても女儀の事なれば、そこ等は御存じ知れぬ事、國の政道致すには、非理法權の四つの文字、第一に仕る。理非の捌きは常の事、理は持ちながら一國の、法を背けば落度となる、理も有り法も背かねど、權威には又壓るるなり、權威と云うては誰あらん、比企の判官能員殿、理非善惡をも顧ず、法も無法も辨へねど、君に出頭無二と云ひ、若狭の局の親御ぢやの、一幡君の祖父様のと、持上したる權威をば、碎く時節の來らぬ故か、洲を潜つて泥水の、澄るをじつと待つてゐる、重忠は温和の武士、花垣伊織お局の、兄と見据て有りながら、首を打しは政道に、權の一字を用ふるなり、又高札の書付は、親經自分の量見にて、學問したる事もなく、智慧に餘計も候はず、善なれば善惡は惡、見えた所をまつ直に、云はねば聞かぬ生れ付、御名を出したが落度なら、獄門の儀は扱置て、火焙にも遊ばせ」と、道理をならべ云ひ立つれば、二人は兎かうの詞なく、差うつぶいてお在す。親經威丈高になり、親經「拙者めも又御局へ、御不審を申すべし。兄を敬ふ禮儀をば、御存じ

あらば、昨日にも、名乗て御出成さるゝ筈、イヤ〜身こそ大事ぢやと、御引成さるゝ心底なら、只今是へは無用な事、生ける時には無禮をし、物をも云はぬ死首に、諄々とした言譯は、心得難し」と冷笑へば、淺茅は頓て差出でて、淺茅ヲ、能い御不審さりながら、遊女は義理の商賣にて、身を庇保など云ふ事は、かけても知らぬ事なれど、大將軍の奥様の、昔のしがを云はるとは、夫の恥辱子の恥辱、判官殿の恥辱にて、名乗り合ぬは伊織殿、只一人の恥辱ぞと、最かるくしき量見か、思ひの外に兄上の、身を滅ほせし悔しさの、言譯もせず御首を、烟になして亡跡を、弔らひ給はん其爲に、御所を諸共出たれば、再び歸る心でなし。高札を打割りて、首を此方へ渡されよ。但しは了簡成るまいかと、守刀を取出し、妹が抜けば姉も抜き、どうぢや〜と詰寄るは、何れせつなき心なり。親經ハツト感涙し、親經「何しに惜み申べき、首は勿論驅共、只今進上致さん」と、櫃を明くれば伊織之介走出で、「ヤレ妹よ」兄様か「是は〜と計にて呆れるも又涙なり。伊織涕を押拭ひ、伊織「昨日の恨引替へて、今日の心底満足せり。某當地へ來る事、御身に逢うて身の榮花、極めん爲にて更になし。去年三月五日の夜、羽黒山の修驗者、豪海と云ふ法師に、一夜の宿を貸けるが、親支蕃が寢首を掻き、夜の内には逃失せしを、此所やかしこと草を分け、縁を求めて尋ねれども、知れぬこそ道理なり、頼家卿の師依僧にて、

營中を離れぬよし、狙ひ寄るに手術なく、そなたを語らひ討ん爲、遙々此所に下りし」と、始終を語れば若狭の前、若狭「こはそも夢か淺ましや、假令暫しは別るゝとも、待つとし聞かばいつぞは又、鎌倉へ呼取て、朝夕御顔を拜まんと、仇の頼みもなき身ぞ」と咽入りく歎かるよ。漸々涙を押し止め、伊織「能くこそ思ひ立給ふ、親の敵と云ふからに、討たて叶はぬ道なれば、心を盡し氣を碎き、狙ひ果せて討ち給へ。兄様頼む」と云様に、守刀をすばと抜き、心元に刺通せば、こはそも如何にと人々は、驚き騒ぐ計りなり。伊織は膝に搔抱き、伊織「心得難き有様や、兄弟名乗合うたるが、一分立ぬと云ふ事か、様子を語れ」と云ひければ、若狭は苦しき聲を上げ、若狭「ア、愚かな事を宣ふかな、廻り逢うたる嬉しさは、冥途の道の土産ぞや、宿世いかなる報にや、鬱も憂さも悲さも、身に積む罪の味氣なや。聞けば聞く程自らは、世に存へん様はなし、判官殿の常々に、若狭の誠の親兄弟、生て此世にある内は、いつか名乗出づべきと、心の休まる事なしと、戯れ事にのたまひしが、其豪海と云ふ法師、分けて懇志の中なれば、それを頼みて父様を、殺し給ふに紛れなし。討れし親も自ら故、討する親も自ら故、今又狙ふは誠の兄、手引をせぬは不孝なり、心を合せば是迄の、榮花の恩に預りし、後の親をば親とする、義理に背くが悲しさに、斯こそ思ひ定めしぞや。體は朽て行くとても、我魂は妹の、淺茅が胸に残し置き、兄弟心を合

されて、敵を討ちて父上や、又自らが修羅道の、苦患を早う救うて給べ。本田殿へは取分て、申置
度き事こそあれ、一幡君の行末を、宜に見立てて給はれと、重忠殿へ頼うて給べ、是のみ黄泉の
障りぞ」と、口説言こそ哀れなり。親経涙押拭ひ、親経「お心易く思召せ、伊織殿の御事も、敵を首
尾よう討せん爲、成敗せしと偽りて、大罪人の首を討ち、獄門の木に曝せしも、是皆主人の計略
なり。一幡君を御代に立て、重忠後見致す事、何しに違背申さん」と、世に頼しく答ふれば、若狭
の局手を合せ、若狭「ア、有難や忝なや、此上思ひ置く事なし。兄様去らば」と云ふ聲の、弱ると
聞くぞ玉の緒も、切れて果敢なく成にけり。淺茅も共に泣狂ふを、親経伊織押止め、「姉の魂
止りて親の敵を討つ迄は、こなたの骸は預り物、龜相成れな怪我有るな」と、諫め賺してたづか
弓、「矢付心はさる事にて、云うても敵は本身者、主人などが智慧も借り、力も借つて討ち給
へ。若狭の局の御最後は、沙汰なしく御死骸を、密かに寺へ送らん」と、先長持に昇入れて、本
田は先肩跡は兄、逢はぬ昔の戀しさと、逢うての今の悲しさと、撥ひ較ぶる棒先の、永き別れぞ
是非なけれ。

まよひのすがたる

こやうけいがいに歸り、烏雀枝の深きに集る。實に世の中は仇波の、寄邊はいづく雲水の、身の果いかに知らざりし。御悼はしや頼家卿、瓊樓玉樹の閨の内、二世の三世の七世のと、互に契り交されし、若狭の局何となく、犀形を紛れ出給ひ、今に御行方知れざれば、現心も涙の床、身を知る雨の明暮に、翼しをるゝ雛鶴の、一幡君も朝夕に、母よくの諸聲に、いとど歎きを増鏡、佛うつす姿繪も、それも心に任せねば、せめては夢を頼むてふ、假の枕の假御殿、一念既に亂るれば、迷ひの門を開くとは、知らぬ御身ぞ味氣なき。石に勢あり水に音あり、風は大虚にわたる、形を今ぞあらはす女、掛字を離れて心魂忽ち顯はれ出でたり不思議やな。水莖の筆の禿と身を染めて、眠りならひの夕邊より、幾朝ごみの春秋を、梅は柳に靡き合ひ、松は櫻の合床も、昔語に成りたるぞや。奥様なりの釣夜著に、鴛鴦の衾の羽根かはし、情かはすも色の淵瀬と、水のかしはの浮沈む、身は浮草の根を絶えて、娑婆に残れる輪廻の業過は、雲霧の軒端に立ちて雨に霰に、霜に霰に積りくゝて消返りては、又降る雪の姿のふじよ、烟比べは淺ましや。「なう懐かしや一幡君、親子の中は一世とは、誰か云ひけん空言や、泣音は遠き苦の下、露のそこなる魂に、答へて餘り悲しさに、姿をかりの懸物に、映りて是まで來れり」と、障子の内の床しけに、すつくと立ちてお在す。頼家見るより走出で、「恨めしの若狭やな、妹脊の

山の中を行く、吉野の川のよしや世に、何がつらうて悲しうて、屋敷は遁出でけるぞ」「ア、愚かなりく、誰に恨みを由井が濱、親同胞になのりその、名乗れ逆しも假初に、忍び出たる閨の戸の、跡だに未だ鎖ざりしを、誰が通ひ路と今ははや、つまや重ねし小夜衣、妬ましの男やな、いやらしの妬みや」と、逆んとすれば引戻し、拜めど顔を打振て、格氣は女の手癖口癖往古今も、貞女きう女もていかかづらや薦藁、這纏はれても、此身元よりうへきにあらねば、臺に輝く鏡もなし、煩惱菩提は法の道連、あら面白の世の中や。夕邊朝たの鐘の聲、寂滅爲樂と誓けども、聞て驚く人もなし。花は根に、鳥は古栖に歸れども、行きて歸らぬ死出の道。「申殿様」なんぞ「酒をばふつより止めさんせ」なせに「色遊をも置しやんせ」「そりや成らぬ」「すれやどう云うても止めぬ氣か」「おといかなことく」「そんなら妾は最う往る」「どこへ」「あの世へ」「あの世とは」「はて冥途へ往まする」頼家はつと氣を注て、「何と冥途へ歸るとは、扱は此世を去りしよな」「藻に住む蟲の我からと、刃の上に消し身の、此世に心は止めねど、迷ひ來るは君故ぞや。直きを捨て曲るに、親み給ふ誤りも、色と酒との二つとぞ、諫め申さん爲ばかり、二度見え候なり。唐土玄宗皇帝は、御心賢くて治まる御代は五十年、國土も民も太平の、天子と呼れ給ひしが、海棠眠る楊貴妃の、桃の媚ある顔ばせを、御目尻に懸りしより、逆臣起つて御鞏も、帝都の外

に出給へば、比翼連理と契りたる、羅縷の袖も仇し野の、露かあらぬか魂の在所を、尋ね詫びさせ給ふとかや。憂き事を暗部の山の鶯の、子に迷ふのも恩愛の、薄き契りの袂には、涙を包む春雨に答める花の若君を、最一度見たし抱きたし」と、障子の元に立寄れば、コハなんとせん情けなや、此世あの世と立隔つ、罪障の雲高くして、涙の霧や戀慕の霞、暝々朦々朧々として見れども見えす聲も聞えず。南無三寶親子は一世の契り知られて、泣て笑うて悶え焦れて、かつばと伏してぞ泣き居たる。頼家頻に大音上げ、「李夫人去つて漢王の、空しき床の寫繪に、魂迎せし烟のうち、云はず笑はぬ佛を、歎きしも身の上なるを、現世の逢瀬味はずば、刃に死して此世を去り、極樂諸天は愚かの事、假令地獄の底迄も、誘へ連立て伴へ」と、手に手を取て行くも歸へるも逢坂の、關も此身は止め得ぬ、泣も笑ふも夢よ現よ。幻よ、最早別れのあら堪難や、刃の罪に修羅の太鼓の「去ば」と云へば、「暫し」と止むる、袖振り放せば、目にこそ見えね、踏む足元は猛火の煙、こは淺ましやと、逃つ轉べどまた行く先も、火焰の煙に姿も焦れ、身慄してこそ立たりけり。悪かれと思はぬ山の峯にだに、あふなるものを人の歎きは、「君を侮り民を惱す判官父子が悪心惡逆、縁にひかるよ我身に報うて、廻り車のくるりくるく、くる夜もく明けてもく、千年萬年、百千億劫獄卒惡鬼の笞に打れ、山に上れば劍に劈き、谷へ下れば紅蓮

のこほりに、白無垢却つて唐紅の、花も紅葉も月も雪も、人間萬事は胡蝶の戯れ、酒は仇をば結ぶの刃、色は命を切るの鉞、皆をり捨て今日より政道正し給へ」と、聲華やかに夕告鳥の形は其儘消てんけり。頼家泣くく慕ひ惑うて、座敷の隈々此所よ、其所よと尋ね廻れば、又立歸るえんぶの有様、向ふに翻然と形を顯はす。抱き止んと走り懸れば、其儘消えて電光石火の、水の螢のちらく、ちらりく、と立廻る、面影月影諸共に、あくる詫しと云ふかと思へば、形は其儘元の掛字に立戻り、晝空事とぞなりにけり。頼家はつと手を打て、「迷悟三界唯一身、昨日の酒の酔醒て、今日は衣の玉を得つ、家には子あり弟あり、國の警衛は和田秩父、動ぎなき世の鎌倉山、我身は思ひきりが谷、唯今幽靈尊場へ、手向の花」と鬘を、切て彼所へ投げ給ふ。順縁あり逆縁あり、共に成佛得脱の道の道とは、往古の聖人も説き置き給ひけり。

第五

天道は滿るを缺き、地道は驕奢を憎むとかや。扱も判官能員は、若狭の局自害故、積惡世上に露顯の上、先つ頃より頼家卿、御不例甚だ重うして、事極り見えければ、謀計日夜身に迫り、野心の胸に手を置て、御次に控へ居る處へ、願行院豪海は、御祈禱の爲宿直して、御枕元に居

たりしが、徐りくと忍出で、判官を見るよりも、豪鷹ヤア比企殿か」判官法印か、先を君の御容體、如何渡らせ給ふぞや」豪海「然れば次第に日を追て、元氣弱らせ給ふと見え、正體も無き御風情、コレ大切の場に成りしぞや。今にも尼君北條など御居間に詰かけ、御家督の沙汰あらば、貴公の仇とならん事、鏡にかけて見えた事、此頃心を盡されし、用意如何」と嘴けば、判官莞爾と打笑ひ、判官「御坊氣遣なさるよな、そこらは疎忽らぬ呑込だ。言ると通り毛蟲めら、病ぼうけの頼家に、差込れては年來の大望が成就せぬ、所詮本復ない命一思ひに刺殺し、御家督は一幡へ御相續の遺言と、鎌倉中へ披露せば、差詰め拙者は執權役、悴どもは自から、外威の威を振ふべし。貴僧へも又千石か、二千石は知れた事。其上にも和田秩父、北條などが意地ばらば、片端から欺し討。コレ床の下を掘抜いて、忍びの者を入れ置た、悦び給へ」と云ひければ、豪海ぞくく小踊し、豪海「ハテ御殊勝な御了簡、萬事は頼み上ます」と、頷き合うて居たりけり。頼家卿それぞとは、夢にも知らず御寐間より、徐々と歩み出で、兩人に打向ひ、頼家「今日は一入氣も勝れず、宿直の者がつくくと、取廻すのも鬱としい、暫く爰で語らう」と、打解け給ふぞ危ふけれ。二人は悦び目配せし、左手右手より飛かより、刀を胸に押當て、判官「コレ迂愚殿、どうで快氣のない命、生けて置ては某が、大望の妨げ、覺悟なされ」と突掛る、頼

家ハツト計りにて、差俯伏て在せしが、稍有つて宣ふは、賴家「人窮する時は偽り、烏窮する時は搦む、窮鼠却つて猫を喰ふとは汝等が事なるよな。エ、過つた重忠や義盛、數度の諫言を思ひ出るも恥しや。覺悟極し上からは、命は更に惜からず、爰を放せ腹切る」と、二人を左右へ突倒し、既に斯よと見えける時、怪しや御座の疊の下、ぐわらりぐわたりぐわたりと、百千萬の地雷、天地も崩ると如くにて、賴家卿の座ます、御座の疊の下よりも、ずつと差上げ朝比奈が踏んばたがつて立たるは、けんろう地震の湧出かと、恐れ慄く計りなり。判官漸氣を静め、判官「ヤア後れたかかねぐに、示し合せし忝共、笠原中野は何所にある、出あへぐ」と呼ばれば、朝比奈かつらぐと打笑ひ、三郎「甲に似て穴を掘る鼯鼠のへろぐ武士、御用ならば進上」と、ばらりぐと人礫、投げ出しぐと投げ出し、大太刀寛けすと寄り、三郎「コリヤそこな護摩の灰、身が法力の鐵縛、三寸繩の數珠繫ぎ、ナント弟子にならぬか」と、二人が細首引搦み、えいやぐと絞付れば、眼を見出し血を吐て、「眞平御赦免ぐ」と、手を合するぞ心地よし。斯る所へ和田秩父、本田花垣駈來り、伊織「出來したぐ朝比奈」と、煽ぎ立れば義秀は、三郎「コレ伊織殿、此法師めは其許で、御慰みに料理あれ、判官は某が、只今庖丁致すぞ」と、首宙に打落す。伊織もすかさず豪海を、氣も堪らず打放す。「テ、潔よし面白し」惡人退治國

繁昌、佛法繁昌武家繁昌、五穀成就願成就、佛力神力の整ふ國こそ目出度けれ。

鎌倉三代記終